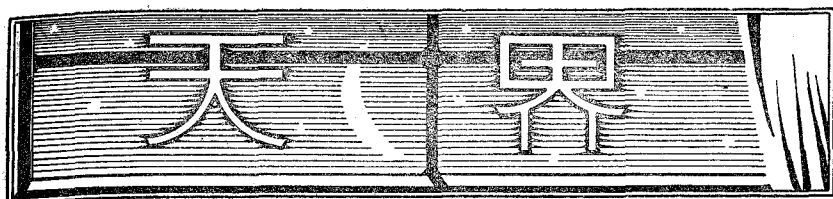


|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 1943年の編暦週期いろいろ (1943年の天文年鑑)   |
| Author(s)   |   |
| Citation    | 天界 = The heavens (1942), 23(259): 1-1   |
| Issue Date  | 1942-12-01  |
| URL         | <a href="http://hdl.handle.net/2433/168544">http://hdl.handle.net/2433/168544</a> |
| Right       |   |
| Type        | Departmental Bulletin Paper   |
| Textversion | publisher   |



第259號 (第 23 卷)

(昭和18年) 第 1 號

### “1943年”

この1943年は、全世界が戦争中であるとは言へ、注目すべき天文現象の可なり多い年である。まづ二月5日の朝、北海道に見える皆既日蝕は、わが日本の學者のみに與へられた太陽研究の好機會であるが、1940年も1941年も共に日蝕は戦亂と悪天氣とに妨げられたのであるから、1937年以來實に6年ぶりで觀測の好結果を闘ひ取らねばならぬ責任を感じしめられる。尙、これを最後として20年間、我が國內の皆既蝕は見られないことも忘れてはならない。

太陽は最近年漸次その黒點活動を減じつゝある。極小期は今1943年か或は1944年に期待されるのであるが、かうした機會には、黒點と地球の諸現象との關係を究明するのに最も恵まれるのであるから、學者の注意は特に敏感でなければならぬ。新群の出現も必ず見逃してはならない。

火星は、1941年の秋以來、又この年末に地球へ接近して來る。星座は牛座で、星の赤緯は北 $24^{\circ}$ を超えるから、天空の位置に申しぶんは無い。尤も、時期は初冬だから、觀測者は多少の苦勞を覺悟しなければならないが、しかし、火星面では晩冬初春の季節に當るのであるから、去る1939年の接近期と比べて、全く違つた景觀が火星の全面に横溢する時であらう。地球からの距離も決して悲觀すべきものでなく、十一月の頃には視直徑が $18''$ に達するのであるから、熟練家は多少望遠鏡の倍率を高めれば、充分な觀察研究は遂行し得ると思ふ。

金星は夏季の宵天に於て離角と光輝の極限に達し、又、秋期には、曉天に於て、全く同様な状態となる。従つて、今1943年は、大體に於て金星を全年にわたつて、あらゆる姿に於て觀察することが出来る。實に之は“金星の年”である。勿論之は、水星と同様、晝間にも觀察すべきものであつて、晴天にきへ恵まれれば、研究者は多忙であらう。

土星も年末に地球へ接近して來るが、今年は1928年以來、18年ぶり、輪の視直徑が極大となり、ほゞ $21''$ に達する。勿論これは土星の全體の視直徑より $3''$ も大きい。故に、單に望遠鏡の視野の中の形としても驚異的な姿だが、觀測者は、毎晴夜、この大形の輪による恒星の掩蔽の有無に特に注意すべきである。

#### 1943年の編曆週期いろいろ

|              |             |              |
|--------------|-------------|--------------|
| 干 支……………癸未,  | 金字週期 …… 6,  | 太陽週期………… 1,  |
| エバクト……………24, | 聖日符號………… 0, | ロマの律會…………11. |